「日々の理科」（第 1119 号） 2017（H29),-7,30

「北極圏旅行記 2017 夏（７）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

～7 / 27 ヴィルヘルミーナからの帰路～

ヴィルヘルミーナでは数時間のわずかな滞在でしたが、一度来てみたかった街なので、大変満足できた。写真は Vilhelmina Skola（学校）である。何という美しい建物だろう。スウェーデンの学校では 10 週間の夏休みがあるそうだ。「先生方は夏休みをどのぐらいとれるのですか？」と聞いたら、何と約９週間ということだった。日本の学校の先生方とは雲泥の差だ。これだけ長期間ゆっくり夏を楽しめば、子どもも先生方も９月から充実した授業に臨めるだろう。

これも古い学校のように見えるが、ヴィルヘルミーナの駅舎である。頻繁に列車が来るわけではなく、夏の間だけ、１日１往復の観光列車が通るだけだ。それも乗り降りする人がなければ通過という「リクエスト・ストップ」という形式。ちょっとさみしい。

今はすっかりさびれてしまったヴィルヘルミーナ駅も、かつては貨物輸送で栄えていた時代があった。駅構内に 1940 年代の蒸気機関車が保存されていた。日本の静態保存の蒸気機関車と同じで、どこか淋しさが漂う。整備して、この線路を走らせてあげたい。

帰り道は、別のルートを通った。こちらは更に田舎道で、とにかくトナカイによく出くわす。車が来ても一向によけないので、徐行運転で通り過ぎること。

このあたりのトナカイは野生のものはほぼ皆無で、持ち主が決まっている。首輪や耳札の番号でわかるそうだ。今年生まれた子トナカイだけはそれがなく、年に一度、一か所に集めて、札をつけるらしい。それまでは、適当に野山や街の近くを群れで移動している。そんなトナカイを、どうやって一か所に集めるのか、とても不思議だった。

これはもう、民家の庭に大軍団が入り込んでしまっている。車はトナカイに囲まれて、発車できなくて困っていた。もし道をトナカイの軍団が占領していたら、クラクションを鳴らしても無駄である。その場合は、「歩くぐらいの速度で」「トナカイの隙間を」「少しこすりながら」ゆっくり通り過ぎるのが、正しい方法だ。

最後に見たのが、この廃屋。かつては村の集会所兼学校だったようだが、使われなくなって久しい。明らかに建物全体が斜めになっている。現在、この建物を利用している唯一の者は、ツバメである。ガラスの割れた窓から、ひっきりなしにツバメが子育てをしている。夏のスウェーデンにはツバメが多い。この廃屋もキツネや人の害を恐れず、安心して子育てができる場所の一つとして、ツバメには有名なスポットなのだ。

帰りはほとんど奥さま（パトリシアさん）が運転してくれた。長時間の運転で疲れていたのに、我々の為に夕食を作ってくれた。今日の夕食は、ライスとトマトソースの肉と野菜の煮物である。私はこの酢豚に似た手料理が好きで、とても楽しみにしていた。

我々もお礼の気持ちをこめて、日本から持ってきた「いなり寿司の皮・真空パック」と、「レトルトご飯」で、いなり寿司を作ってごちそうした。酢・塩・砂糖はキッチンからお借りした。これが大ヒットで、お二人とも大層な喜びようで、いくつもおかわりをしていた。もう１パックあったので、差し上げたら、孫のエンジェルちゃんに食べさせるのだと、寿司飯の作り方を熱心にメモしていた。

パトリシアさん（左の女性）は、北極圏にあるポルユス駅の元駅長さんで、駅舎のとなりのバンドラヘム（ユースホステル）を長年経営していた。私も何度も泊って、駅舎にオーロラカメラも取り付けさせてもらった。「あの頃は本当に忙しかった、でも今は静かで時間のある生活です」とおっしゃっていた。新しい街でも友人が多く、本当に幸せそうな生活だと思った。